

紀州藩石橋家『家乗』と朝鮮文学『金鰲新話』

——『剪燈新話』『伽婢子』の侍読・侍講記事と関連し——

邊 恩 田

はじめに

紀州藩付家老三浦家に伝わる文書に、石橋生庵の日記『家乗』があることが紹介されてより、^①歴史学・文学・芸能史・国語学等の各方面から注目を集め、その史料的价值が指摘され研究が進められてきた。^②

とりわけ文学の分野においては、近世初期浅井了意作の怪異小説集『伽婢子』についての記事があることが判明し、しかもその記事が『剪燈新話』と関わる内容である点に、至大なる関心が寄せられるところとなった。

言うまでもなく『剪燈新話』は、『伽婢子』に影響を及ぼした中国の志怪小説として、従来より研究の対象となった作品である。とともに、朝鮮王朝時代初期の梅月堂キムシンスブ金時習作になる漢文伝記小説

『金鰲新話』^{クァモシナ}が、比較すべき作品として重要視されてきた。^③

筆者は、朝鮮王朝時代一五世紀後半成立の『金鰲新話』が、日本において近世初期一六世紀半ば頃「和刻本」として出版されていた事実に関心をもつてよりこのかた、日本各地に伝存する和刻本『金鰲新話』の調査を進め、その報告を本誌65号・70号・72号などで行ってきた。^④

伝本は、なお存在すると筆者は考えているが、和刻本に限らず、朝鮮で板刻印行された「朝鮮本」も日本に伝存する可能性は大きいというのも、現在は中国の大連図書館所蔵にある一本も、^⑤かつては日本の京都にあって、著名な医師曲直瀬正琳マナセシヨウリン（号・養安院。一五六五—一六一一）が所蔵した朝鮮本であった事例があるからである。^⑥さて、その和刻本もしくは朝鮮本の『金鰲新話』が伝存する可能性の最も大きいところが、紀州和歌山である。



図1 和歌山市海善寺にある李真榮・李梅溪一家の墓(1993年6月筆者撮影)

紀州は朝鮮及び朝鮮文化と深い関わりがあった。紀州徳川家の初代藩主となった徳川頼宣は、朝鮮王朝の儒者李真榮(名・一恕。号・一陽齋。字・真榮)を侍講に迎え藩学として儒学をおこし、さらにその子李梅溪(名・全直。字・衡正。号・梅溪)も侍講として厚遇し、父子ともに藩学の草創・発展に大きく寄与し中核的役割を

はたした。また紀州藩の道徳規範となった「父母状」は、儒教の三綱中「孝行」を教えるものであるが、頼宣の命によって梅溪がなしとげた功績であった^⑦。第五代藩主であり八代將軍となった徳川吉宗を輩出したのも、ここ紀州である。紀州は、外来の文物、朝鮮やその文化に開かれた、文化都市であったようである。

したがって紀州藩石橋家『家乗』は、まずもって着目すべき重要な史料となり、筆者はこれまでにない全く異なる観点から関心をもった。それは朝鮮伝奇小説『金鰲新話』の名が録されていないか、書名に限らず作者金時習についてのなにかの言及がありはしないか、また関連する情報が見られないかという関心であり期待であった。

その調査の結果として、本稿では『金鰲新話』の書名が見られること、生菴がその本を買っていることを紹介するものである。

また、『剪燈新話』や『伽婢子』についても、「侍読」や「侍講」の興味ある記事が少なからず見出せたので、これについても報告する。その結果、はからずも『金鰲新話』記事が、それら中国・日本の怪異小説関連記事とあわせ一連の流れのなかにあることが把握できた。生菴の読書世界に、この三作品がともにあつたということになる。

一 石橋生菴の日記『家乗』

紀州藩石橋家『家乗』は、紀州藩の付家老三浦家に儒医として仕えた石橋生菴（名・辰章。俳号・忍斎。寛永十九（一六四二）年—元禄十（一六九七）年？）が残した日記である。

その内容は、寛永十九年五月から元禄十年末までの、生菴が一歳から五十六歳までの五十余年にわたる、漢文体の日記である。出生時の直前から二十三歳までの記事については、筆者が二十四歳の時、寛文五年二月から五月にかけて整理し記し置いたものという。

本『家乗』は、生菴自身および一家親族や知己の消息を記すかわら、出仕してからの勤務日誌でもあり、また天下のさまざまな情報をも記した、希有な日記であると評価されている。

その中でも、文学関係の特徴に限定して重要なのは、「一儒医である筆者が家君に折々に侍読（侍講）申し上げた、その書物の名が一々記されて」^⑧いること、また筆者生菴が「書肆あるいは諸氏から借り受けた書物の名が記されて」^⑨いるという点にある。

その書物は、漢籍・医学書・仏書・史書・文学書等々、実に多方面にわたっている。「竹取物語」「枕草子」「源氏物語」「大鏡」「平家物語」「徒然草」「太平記」といった古典作品から、『好色一代男』『諸艶大鑑』『好色五人女』のような西鶴本まで、中国の儒学書はむ

ろんのこと『詩経』『白氏文集』『烈女伝』、はたまた『剪燈新話』のような白話小説に至るまで、数百に及ぶ^⑩。

まさに『家乗』は、近世初期における一知識人（儒医）の数十年にわたる読書記録であり、また文学享受の様相をも伝えてくれる、得難い貴重な資料であると評価される。

加えてこの資料の貴重さは、書名とともに、当時の書肆の実名が多く記録されていることである。生菴は「遊書肆」という表現で書肆に出かけることを表しているが、書物と読書好きの彼が書肆で楽しむ様子がかがえよう。また反対に書肆の方が屋敷にやってきて本を売ることもあって、『家乗』には当時の京や大坂や地元紀州、そしてまた江戸の（家君の江戸勤番に生菴は随行し藩邸で過ごしている）書肆の名が頻繁に登場している。

長友千代治氏は、当代の書肆が今日とは違い、貸本もし、行商もし、貸本配達もしていたという認識から、書肆は「行商本屋・貸本屋・古本屋を兼業する者」^⑪であったという興味深い特徴を説かれている。

ただ、本を買ったと録していても、実際には購入していない場合もある。数日（もしくは数週間など）たつて返したりもしていて、これが買い方である点は、後述するが注意を要する。

二 『家乗』に見える『剪燈新話』

——生菴、本を買う——

中国の『剪燈新話』、朝鮮の『金鰲新話』、そして日本の『伽婢子』三作品のうち、生菴が最初に買ったのは『剪燈新話』であった。寛文四年（一六六四）二月五日条に、

沽剪灯新話于書肆價四錢五分

とあり、書肆で『剪燈新話』を買ったことを記している。本の代金についても、割注で「價四錢五分」と記している。生菴は二十三歳、まだ出仕していない時である。彼が出仕するのは、三年後の寛文七年（一六六七）九月のこと、光貞が二代目藩主になった年である。彼はこの時に「生菴」の号を賜っている。

ところで、実は、生菴が生菴において最初に買った「本」は、『家乗』に見ると、儒学書の『四書大全』であった。『剪燈新話』購入よりさかのぼる万治三年（一六六〇）十一月十一日、生菴十九歳の時であった。値段を「銀四十有三錢」と記していて、大きい買い物といえるが、この本が学問の必要によって購入したらしきことが、前後の記事からわかる。

すなわち、『四書大全』購入の五ヶ月前万治三年（一六六〇）六月廿八日条には、李衡正先生が「孝経大義」を講じるのを末席で興

味深く聴いたと記していて、講義は八月十四日まで続いたが一席も欠かさなかったと、八月十四日に詳しく書き留めている。「李衡正先生」というのは生菴が生涯師とした前述の李梅溪のことである。

また本購入の翌年すぐ万治四年正月十六日には、李氏立卓丈（李立卓は李梅溪の弟）の「中庸」講義の末席を穢したと記しているし、同年十月廿七日からは、清軒公（清軒は李徳源の号）の「書経」講義を十二月八日まで継続受講したことを記している。さらに翌寛文二年正月十一日からは、子季子が読書始めに講じた「論語」を学び始めたことを記し、三月七日までこれが続いたとも記している。以上主なものだけ挙げたが、生菴が本格的に儒学を学びはじめたことがわかる。

生菴は、『四書大全』購入の万治三年の春、李衡正先生の門生になっていた。この万治三年以降に、学問と読書に関する記事がとにかく増えしかも詳細になっているのは、間違いなく門生として勉学に励んだからであろう。

このように、儒学修学に邁進する生菴が、怪異小説である『剪燈新話』を買っていたという事実もさることながら、これより三十三年後の元禄十年に、主君に『剪燈新話』の侍講を行っている事實は、まことに興味深いことである。これについては後述するが、江戸初期における『剪燈新話』享受の実態を示す貴重な記録といえよう。

ともあれ、『剪燈新話』を買って手もとに置いていた生菴は、その作品についてあらましを知っているという程度ではなく、深く読み味わっていたであろうと推測できるし、またそうであったからこそ、購入四年後の寛文八年の段階で、『伽婢子』を『剪燈新話』と対比し「剽窃」だと看破できたはずなのである。

ではこの時期、日本での『剪燈新話』の出版状況はどうであっただろうか。これについて当代の書籍目録に検してみよう。江戸期の最も古い書籍目録とされる寛文刊（無刊記本）の『和書籍目録』¹²には、「外典」項に「剪燈新話」が載っている。書名に「四冊」という冊数のみを記すだけで、そのほかの説明はまったく見られない。

ところが、寛文十年刊西村又右衛門板の『増補書籍目録作者付大意』（寛文十一年の山田市郎兵衛門板も同様）になると、『剪燈新話』は「外典」から「故事」の項に移されていて、中国書（漢籍）という認識から物語類という認識へと、取扱いに変化があったことがわかり興味深い。書名の下に小文字で、

山陽瞿佑宗吉著

滄洲 訂正

垂胡子 集釋

とある付記に留意しなければならない。作者瞿佑宗吉の名を記すのは当然であるが、続いて二人の人物が記される点が重要である。

垂胡子と滄洲は、朝鮮王朝初期の著名な文人垂胡子林吉と滄洲尹春年であって、『剪燈新話句解』本を出した人物だからである。『剪燈新話』原文の難解語句について、註解を判注で施したのが句解本の『剪燈新話』である。垂胡子が集釈したものが一五四九年に印行されたが、滄洲が訂正を加えたものが一五五九年に新たに板刻印行され流布したのであった。

したがって、書籍目録のいう『剪燈新話』とは、実は『剪燈新話句解』本だということになる。書名に「句解」の字がないものの、原文のみの『剪燈新話』本ではなく、一五五九年板『剪燈新話句解』本を和刻した本、という結論になる。わざわざ「句解」の字を入れなかったということである。そして実のところ江戸期には、『剪燈新話句解』の方が『剪燈新話』として流布したようである。

林羅山も、『剪燈新話』を書肆で見かけ、藏していないので購入したことを「牡丹燈詩并序」で記しているが、そこにも「句解」字は付けられていない。慶長六年（庚子年一六〇一）のことである。しかしこの時羅山が買ったのは、朝鮮刊本の『剪燈新話句解』であったことを、阿部吉雄氏が指摘されている。¹³現在、国立公文書館内閣文庫には羅山手校手沢本の『剪燈新話句解』が伝存している。

和刻本の方をみれば、慶長・元和頃に朝鮮の印刷技術を取り入れた「古活字版」が作られたが、部数も少なく難点があった。印刷技術

が発展し慶安元年（一六四八）に整版本の『剪燈新話句解』が板行されるようになり、出版部数も飛躍的に増えまた継続的な出版・販売が可能となり、広く流布するようになった。

したがって、生菴が買った寛文四年の頃には、たやすく買える出版状況は整っていたわけである。生菴は和刻本の『剪燈新話句解』を買ったとみなしてよいだろう。

そして生庵は、このあと四年後には、『伽婢子』を借りて読んでいる。次項でこれを見よう。

三 『家乗』に見える『伽婢子』

——生菴、本を借りる・侍読する——

浅井了意の『伽婢子』について、『家乗』が貴重な記録を残していることは近世怪異文学研究が注目し指摘されてきた。^①寛文八年（一六六八）五月十日条の記事、

借伽婢子 洛下松雲所集有十三卷剽窃剪灯新話述怪異之事

がそれである。生菴はこの日『伽婢子』を借りたと記している。そして『伽婢子』について割注を、

洛下松雲所集有十三卷剽窃剪灯新話述怪異之事

と施している。

その内容を詳しく見るに、まず、『伽婢子』の作者が京洛にすま

う「松雲」すなわち浅井了意であることを述べ、その本が「十三卷」であることを言う。そしてさらに、『伽婢子』が『剪燈新話』を剽窃していると評し、作品内容については怪異の事を述べたものと説明している。二十一字のなかに、『伽婢子』についての的確な解説と批評を取めた割注といえ、高く評価される一文である。

この割注からよみとれば、生庵が『剪燈新話』だけでなく、『伽婢子』についてもよく知っていたことは明らかであろう。それが本出版の寛文六年（一六六六）三月からわずか二年後のこと、しかも紀州に居住する儒医の生菴であるのは、指摘の通りまことに驚くべきことといえる。

ところが、『伽婢子』と生菴との関係は、本を借りることで終わってはいなかった。およそ一年後には、主君に対して『伽婢子』を侍読をしているのである。その記事はかなりあり、時代順に列記しよう。

寛文六年（一六六六） 三月 （『伽婢子』の出版）

寛文八年（一六六八） 五月一〇日 借伽婢子 洛下松雲所集有十三卷剽窃剪灯新話述怪異之事

寛文九年（一六六九） 閏十月一七日 夜侍読伽婢子

十月一八日 侍読

十月一九日 夜侍読

十月二三日 夜侍読又読明恵記

延宝五年（一六七七） 六月 七日 侍読伽婢子

八月 二日 侍読伽婢子

延宝六年（一六七八） 三月 七日 侍読伽婢子

先に見た『伽婢子』を借りたのは個人レベルの文学享受であったというなら、すぐ翌年の寛文九年閏十月一七日から二三日までは、

主君への「侍読」という方法によるもので、つまり作品のより深い読み・解釈が必要な享受であった。それはほぼ毎夜、主君三浦為時に対して行われ、最終日には「明恵記」も侍読したと記す。そしてまた、八年ほどのちの延宝五年六月七日と八月二日、翌六年三月七日にも、断続的で回数が少ないものの侍読が行われた。

このように『伽婢子』は、およそ一〇年にわたり生菴の親しい文学としてあつたことが知られた。ところでこの時の主君というのは三浦為隆である。仮名草子『あだ物語』の作者三浦為春の孫にあたる。生菴が俳諧に親しんだのも、主君の影響であることは、土谷泰敏氏と江本裕氏が説かれている⁵⁾。

まことに『伽婢子』は、三浦父子がともに愛好した怪異小説であった。しかし作者浅井了意は同時代の人物であるので、現代怪異小説というのが的を得た言い方であるかもしれないが、生菴が仕えた三浦家は、学識あり文学・文芸を好む家柄であり、生菴は儒医とし

て仕えながら多くを学びまた知識を共有していたことと思われる。

このように生菴は、中国の『剪燈新話』だけでなく、自国日本の新怪異小説『伽婢子』をもとに読み親しんでいたことを確認してほしい。

四 『家乗』に見える『金鰲新話』

——生庵、本を買う——

さて、これまで『剪燈新話』（『剪燈新話句解』）と『伽婢子』にかかわる記事に検討を加えてきたが、朝鮮の『金鰲新話』もまた、石橋生菴の読書世界にあつたことを報告したい。

生菴が『金鰲新話』を書肆から買ったと見てよい記事は、延宝六年（一六七八）十月十七日条の

夕如書肆沽金鰲詩話儒佛筆陣

という記事である。夕べに書肆に行き、「金鰲詩話儒佛筆陣」を買ったという内容になり、原文には「金鰲新話」ではなく「金鰲詩話」と録されており、「詩」の一字だけが異なっている（図2）。

筆者は、この「金鰲詩話」というのは、書名の「金鰲新話」を誤記したものと判断する。その理由、根拠として、まず「沽」のあとの「金鰲詩話儒佛筆陣」に注目し、これが書名かどうかという問題がおこる。しかしこれが書名だと判断できるのは、後の十月二十八



図2 『家乗』延宝六年十月十七日条の「金鰲詩話」

日条に、つまり本を買ってから十一日ほどたった日の日記に、

環儒佛筆陣

という記事が出ているからである。「環」は返却の意味であるので、この部分の意味は書肆に「儒佛筆陣を返した」となり、「儒佛筆陣」が本の名前であることが判明するからである。そして、「儒佛筆陣」が書名であるなら、「法」字のすぐうしろの四文字「金鰲詩話」も、当然書名と判断すべきこととなる。つまりは、「儒佛筆陣」の本は返却したが、「金鰲詩話」の本は返却しなかった、ということになる。

長友氏によれば、「生庵は購入の積りで本を持ち帰って取捨選択し、不必要な本は返却、購入本の精算を後日する^⑧」という買い方であったと指摘されているが、これなどその事例にあてはまる。

であるなら次に、「金鰲詩話」という本が実在するのかどうか問題となり、日本の本なのか中国あるいは朝鮮の本なのかということになる。ひとまず書名と見て、中国・日本・韓国の文学事典と百科事典類、「国書総目録」にあたったところ、同名の書は確認できなかった。

とするなら、何かの錯誤か書き間違いだと判断するしかなく、「金鰲詩話」と最も近似し三文字が同じ書名の「金鰲新話」が候補にあり、「詩」の字は、「新」とあるべきを誤記したものであるという結論にたどりつくことになる。

実際、『家乗』本文には、次のように書名の誤記が見うけられる。

天和四年五月廿六日 「好色一代記」 ↓ 「好色一代男」の誤記

天和四年七月十一日 「諸艶大鑑」 ↓ 「諸艶大鑑」の誤記

貞享五年十月 廿日 「男色大全」 ↓ 「男色大鑑」の誤記

などである。このような一字誤記の事例は、右の結論の証左となる。

以上のように、生庵は、朝鮮王朝初期成立の伝奇小説集『金鰲新話』を書肆で購入していたと認められ、彼は、中国・日本・朝鮮の

〃 四月十四日 侍講
 〃 四月十五日 侍読
 〃 四月十六日 侍講
 〃 四月十八日 侍読
 〃 四月十九日 侍講新話了

右にみるように、侍講（十五日と十八日は「侍読」と記す）は九日間にも及び集中して行われている。生菴はいまや五十六歳。老齡の域に入りつつあるといえようが、この時の学問的実力は相当のものであつたはずである。主君への講義がどのようなものだったか興味がかれるが、残念ながら記事には具体的に表れていない。

かつて若かりし頃、『剪燈新話句解』本を買っていた生菴であり、また『伽婢子』を借りて読み『剪燈新話』の「剽窃」だと看破した生菴であつたが、もしかするとこの時彼は、「剽窃」ではなかつたと、かつて自らが下した『伽婢子』への評価を改めていたかもしれない。

おわりに

以上において、石橋生菴の『家乗』のなかに、『剪燈新話』『金鰲新話』『伽婢子』の中国・朝鮮・日本三国の怪異小説がすべて登場していることと、その様相について検討してきた。

これまで知られていた寛文八年の『伽婢子』記事以外に、あらたに『剪燈新話』と『伽婢子』に関わる記事があることと、『金鰲新話』に関わる記事が認められることを報告してきたが、生菴の読書世界には、この三国の怪異伝奇小説が、言いかえるなら東アジアの怪異小説がともにあつたということが、確認された。

紀州藩石橋家『家乗』には、朝鮮王朝の文学との関わりについてまだ解明すべき課題が多いようである。『金鰲新話』以外にも、生菴は、十六世紀の文人徐敬徳の『花潭集』を李精舎から借りていて、これを手写までしているのである（寛文九年八月）。

生菴にとって朝鮮の儒学・文学は身近で親しいものとしてあつたようである。その詳細は別稿にゆだねたい。

注

- ① 和歌山大学紀州経済史文化研究所蔵の『家乗』は、その一部を含む三浦家文書が昭五二年三月『和歌山県史 近世史料二』に掲載紹介され、昭五九年清文堂出版より影印本が出された。
- ② 尾形仿「寸言一儒医の日記から」『文学』昭五七年二月号～五八年一月号。上田衛『家乗』芸能記事一覽』『芸能史研究』八四号、昭五九一。長友千代治『石橋家家乗』の読書記事』『歴史公論』一一三号、昭六〇。四月。山田和人「報告資料集その二」三浦家文書の会編集、昭六〇。柏原卓『石橋家家乗』の表記・文章・語彙』『紀州経済史文化史研究所紀要』第五号、一九八五。五。加美宏「形成期の太平記読み――

夏生氏著書、富士昭雄氏編著書など。

⑮ 注②の土谷氏、江本氏の論考。

⑯ 注⑩の六一頁。

⑰ 注④の拙稿『同志社国文学』第六五号。

⑱ 鈴木健一氏『林羅山年譜稿』ぺりかん社、一九九九。